

検査の目的と結果の見方

形態	B M I	身長と体重のバランスで肥満度を見る検査です。
	腹囲	メタボリックシンドロームの診断のためにお臍の周りを測ります。
尿検査	1. 尿蛋白	腎臓の障害により数値が上昇します。また、ストレスや激しい運動でも上昇することがあります。
	2. 尿潜血	尿路の異常(炎症・結石・腫瘍など)で見られます。
	3. 尿ケトン	重症糖尿病、悪阻、尿毒症、肝障害、高熱時などで異常となります。
	4. 尿ビリルビン	肝・胆道疾患、膵臓疾患、薬物中毒などで異常となります。
	5. 尿ウロビリノーゲン	肝機能障害、胆汁色素生成増加、及び腸内容停滞がある場合などで値が上昇します。
	6. 尿比重	尿中に溶解している固形成分の量や濃縮の程度を示し、腎機能を見る検査です。
	7. 尿沈渣	尿路感染症の診断や腎機能をみる検査です。
腎機能検査	1. 尿酸	『痛風』の原因となる物質で、この値が高いときは高尿酸血症といえます。数値が高いと尿路結石も作られやすくなります。
	2. 尿素窒素・クレアチニン	老廃物の一つで、腎臓での排泄機能に異常があると値が上昇します。
	3. ナトリウム(Na) カリウム(K) クロール(Cl)	体液の水分バランスがとれているかをみます。
	4. カルシウム(Ca)	副甲状腺ホルモンやビタミンDの作用によって高値を示します。
	5. 無機リン(IP)	甲状腺ホルモンやビタミンDによって調節されており、副甲状腺機能低下、ビタミンD過剰摂取などで値が上昇します。
	6. マグネシウム(Mg)	細胞内に豊富に存在するイオンで、腎機能障害で値が上昇します。
胸部検査	1. 胸部X線検査	肺結核や肺癌の早期発見のほか、心臓や大動脈の状態を調べます。
	2. 心胸比	心臓陰影と胸部全体の幅の比で、正常値は50%以下です。50%を超えると心肥大が疑われます。肥満者では見かけ上、心胸比が大きくなる場合があります。
	3. 喀痰細胞診	肺癌診断の必須検査です。特に胸部レントゲン写真では発見できない早期癌の発見の重要な手段です。
	4. 胸部CT	マルチスライスCTによる胸部断層撮影を行います。肺や心臓、大血管の形態や病変の有無を調べます。
肺機能検査	スパイロ測定	気管支を通る空気の圧力(気道抵抗)や肺活量などを測定し気管支喘息の診断や肺気腫の早期発見に有効です。 肺活量：最大吸気位から最大呼気位までの呼気量で肺活量の実測値 %肺活量：年齢・性別・身長から予測される健常予測値に対する実測値の比率 1秒率：努力肺活量(最大呼気量)測定時の、最初の1秒間に呼出される呼気量(1秒量)の努力肺活量に対する比率
血圧測定	血圧	測るときの状態でかなりの変動があります。日を改めて数回測定し、自分の血圧の傾向を把握することが必要です。高血圧をそのまま放っておくと脳卒中や心筋梗塞、腎障害を引き起こす原因となります。
循環器検査	1. 安静時心電図	心肥大や冠動脈硬化(狭心症や心筋梗塞)、不整脈などの診断をするための基礎的な資料となります。安静時心電図検査と、心臓に一定の運動負荷をかけ心電図を調べる負荷心電図検査とがあります。
	2. 運動負荷心電図	運動負荷をかけることにより心臓に送る血液を増加させ、冠動脈硬化による変化を見ます。
	3. 心臓超音波検査	超音波を心臓の各部位に伝搬し、反射したものを画像処理して心臓の実際の動きや形態を検査します。
	4. ホルター心電図	日常生活中心電図を24時間に亘って記録し、普通心電図検査ではわかりにくい不整脈や狭心症などがいないかを調べます。
筋	C P K	心筋や骨格筋にある酸素でこれらの筋がダメージを受けると高値となります。

肝機能検査	1. 総蛋白・蛋白分画・アルブミン・A/G比	肝臓や腎臓などの異常、水分摂取異常、感染症血液疾患などで異常を示すことがあります。
	2. ビリルビン	黄疸を示す指標で肝・胆道疾患、体質性疾患、溶血性疾患で上昇します。
	3. TTT・ZTT	肝臓疾患や膠原病、悪性腫瘍などで値が上昇します。
	4. GOT・GPT	心臓や肝臓の細胞の中に含まれる酵素で、肝炎や脂肪肝、肝臓がんなどで値が上昇します。
	5. ALP (アルカリフォスファターゼ)	骨・腎臓・肝臓に多く含まれる酵素で、骨疾患や肝臓・胆道疾患で値が上昇します。
	6. LDH	あらゆる組織の細胞に含まれる酵素で、心筋梗塞や急性肝炎、白血病などで値が上昇します。
	7. コリンエステラーゼ	肝臓でのみ作られる酵素で、肝硬変や肝炎・肝臓がんで低値を示し、脂肪肝などで高値を示します。
	8. -GTP	肝臓に多く含まれる酵素で、アルコール性肝障害や慢性肝炎などで値が上昇します。
	9. LAP	肝臓や胆道に多く含まれる酵素で、肝炎、肝硬変、閉塞性黄疸などで値が上昇します。
	10. HBs抗原	B型肝炎ウイルスに感染していないかを調べます。
	11. HBs抗体	以前に肝炎ウイルスに感染したかどうかを示しています。
	12. HCV抗体	C型肝炎ウイルスに感染していないかを調べます。
膵機能検査	アミラーゼ	主に膵臓から分泌される消化酵素で、急性膵炎など膵臓に障害があると特に高値を示します。
脂質検査	1. 総コレステロール	血液に含まれる脂質で、ホルモンや細胞膜を作りますが、高値が続くと動脈硬化を起こします。
	2. HDLコレステロール	いわゆる『善玉コレステロール』で、血液中の悪玉コレステロールを回収します。少ないと、動脈硬化の危険性が高まります。
	3. LDLコレステロール	いわゆる『悪玉コレステロール』で、多いと血管壁に蓄積して動脈硬化を進行させます。
	4. 中性脂肪	エネルギー源となりますが多すぎると脂肪として体内に蓄積され、動脈硬化を起こします。
甲状腺検査	1. 甲状腺機能検査	甲状腺機能検査(TSH・FT3・FT4)と、自己抗体検査(サイログロブリン・サイログロブリン抗体)があり、甲状腺機能亢進と甲状腺機能低下を診断する検査です。
	2. 自己抗体検査	
	3. 超音波検査	甲状腺の腫瘍などの有無を超音波で調べます。
免疫反応	1. CRP	炎症や病気などで体の組織が壊れたときに血中に増えるたんぱく質で、細菌・ウイルス感染などで値が上昇します。
	2. ASO	溶血性レンサ球菌(溶レン菌)感染を見る検査で、猩紅熱・急性糸球体腎炎・リウマチ熱で高値を示します。
	3. RA・RF(RA定量)	関節リウマチについての検査で、膠原病などの場合にも陽性(異常値)となることがあります。
ワッセルマン反応	ワッセルマン反応	梅毒の感染や潜在する梅毒をチェックする検査です。

腫瘍マーカー	1. - フェトプロテイン (AFP)	主に肝細胞癌・移行性肝癌で著明に上昇するため、スクリーニングに利用されます。また、慢性肝炎や肝硬変などでも増加します。
	2. CEA	大腸癌などの消化器系を中心に各種臓器の癌の診断に利用されますが、慢性の肝疾患や大腸炎あるいは正常な人でも上昇することがあり、特に喫煙者では異常者が多いとされています。
	3. CA19-9	主に膵臓癌の診断に利用され、ついで胆道系癌、胃癌、大腸癌などの消化器系癌で上昇するとされています。
	4. PSA (前立腺特異抗原)	前立腺肥大症でもある程度の陽性所見を示しますが、前立腺癌に限って初期癌でも30～50%の陽性率を示します。
	5. シフラ (CYFRA21-1)	肺癌の補助診断法として用いられており、ある種の肺癌では初期においても陽性率が高く、progR Pは肺癌の中でも極めて悪性度の高い肺小細胞癌の初期において陽性率が高くなります。
	6. CA125	主に卵巣癌の診断に利用されます。子宮内膜症でも高値を示すことがあります。
糖代謝	1. 尿糖	尿の中にブドウ糖が出ているかを調べます。糖尿病発見の手がかりになります。
	2. 空腹時血糖	血液中のブドウ糖のことで、エネルギー源となります。高いと糖尿病、膵臓がん、ホルモン異常が疑われます。
	3. ブドウ糖負荷試験	75gのブドウ糖を飲用して、身体の糖に対する処理能力を見る検査で糖尿病かどうかを診断するための検査のひとつです。
	4. HbA1c	過去1～2ヶ月の平均的な血糖の状態をみています。飲食によって変動する血糖値と異なり、HbA1cはほとんど変動しないので、糖尿病が疑われたときの検査として有効です。
末梢血検査 (貧血検査)	1. 白血球数	細菌などから体を守る働きをしています。体に炎症が起こっていると値が上昇します。
	2. 赤血球数	細胞に酸素を送るという重要な働きをしています。低値だと貧血、高値だと多血症が疑われます。
	3. 血色素量 (ヘモグロビン)	赤血球の中に含まれている蛋白の一種で、貧血の際にはこの値が低下します。
	4. ヘマトクリット	血液中に含まれる血球成分の容積の割合をいいます。貧血などで低下します。
	5. MCV (平均赤血球容積)・ MCH (平均赤血球ヘモグロビン量)・ MCHC (平均赤血球ヘモグロビン濃度)	貧血の鑑別と原因を追求していくうえで、また貧血のタイプを調べるために必要なものです。
	6. 血小板	止血作用があります。減少により皮膚の点状出血、鼻出血などをきたしやすくなります。
	7. 網状赤血球数、血清鉄 (Fe)、 総鉄結合能 (TIBC)	主に鉄欠乏性貧血、再生不良性貧血を診断する検査です。
	8. フェリチン	鉄貯蔵、鉄代謝の指標で鉄欠乏性貧血、再生不良性貧血などのほか、白血病・骨髄腫などの造血腫瘍で高値を示します。
	9. 白血球像	さまざまな白血球の比を調べ、異常の診断を行います。
胃部検査	1. 胃透視	バリウム (造影剤) を飲み、放射線を使って体の外から胃や食道・十二指腸の形や病変の有無を調べます。
	2. 胃内視鏡	ファイバースコープを口から飲み込んで、食道から胃、十二指腸まで挿入し潰瘍・ポリープなどの有無を観察したり、組織の一部を採って (生検)、悪性細胞 (癌) などがいないか調べます。
	3. ペプシノーゲン法	血液検査で胃の萎縮性 (シワシワ度) を調べます。萎縮性胃炎になると胃癌になりやすい傾向があります。バリウムなどを飲む必要がなく、簡単に胃の状態を調べることができます。

腹部検査	1. 腹部超音波検査	肝臓・胆嚢・膵臓・腎臓といった腹部の臓器の状態を超音波でみる検査です。
	2. 腹部CT	マルチスライスCTによる腹部断層撮影を行います。腹部の臓器の状態や腫瘍など、病変の有無を調べます。
大腸検査	1. 便検査	消化管の出血の有無を調べます。
	2. 大腸内視鏡検査	ファイバースコープを肛門より挿入し、大腸全体の病変部を観察したり、組織の一部を採って(生検)悪性細胞がないか診断をします。S状結腸内視鏡検査は、肛門から約25cmのS状結腸までを観察してポリープや癌がないか調べます。
眼科検査	眼底検査 眼圧検査	高血圧や糖尿病、動脈硬化によって生じた血管の異常を詳細に知ることができます。眼圧は主に緑内障の診断に用いられる検査です。
歯科検査	口腔・歯の検査	歯槽膿漏、歯肉炎、虫歯、歯垢や不正交合などを調べます。
整形外科検査	頸椎・腰椎・膝関節 X線検査	レントゲン写真により骨の異常を調べます。
骨密度測定	検査方法 骨塩分析(骨密度) (BMD) 超音波法	骨密度(強度)検査は骨内のカルシウム量を測る検査で、X線を利用したもの(BMD)と、超音波を利用したものがあります。X線を利用した検査は腰椎と股関節(脚の付け根)の骨密度を測定します。超音波法は、機器の種類によりここでは、アキレス法とAOS100法があり、どちらもかかとの骨に超音波をあて骨強度(骨密度とほぼ等しい)を測定します。骨強度評価は、骨密度が最大となる若年成人値と比較して80%以上を正常、70%未満を要指導としています。
女性科検査	子宮ガン・乳ガン検査	子宮頸部の細胞診や乳房の診察、または超音波の検査をします。
	マンモグラフィ (乳房撮影)	乳房は柔らかい組織でできているため専用の装置を使い、圧迫して撮影します。乳がんをはじめ乳房にできる病気のほとんどを見つけることができ、しこりとして触れないごく早期の乳がんも発見できます。
頭部検査	頭部MRI検査	さまざまな角度から強力な磁力を当てて頭部を撮影し、断層画像化して病気を診断します。脳梗塞や脳動脈瘤などの早期発見に役立ちます。また、放射線による被爆がないため安心して受けることができます。
動脈硬化検査	頸部超音波検査	脳に血液を運ぶ頸動脈は全身の動脈硬化をあらわします。頸部に超音波を当て、頸動脈の動脈硬化の有無・程度を調べます。
	ABI	全身の血管の硬さと詰まり具合を見て動脈硬化の有無・程度を調べます。